

信仰、従順、恵み

精神的な家を建てる

聖書は、信仰生活を例えるために、家を建てるという力強い比喩を用いています。それは、神の王国のために建てられる霊的な建造物であり、信仰、従順、そして恵みが不可欠な柱として織り合わされています。この比喩は、マタイによる福音書 7 章 24-27 節におけるイエスの基礎的な教えから始まり、コリントの信徒への手紙一 3 章 9-15 節におけるパウロの実践的な教えへと広がり、エフェソの信徒への手紙 2 章 19-22 節における信者たちの結びつきへと続き、ペトロの手紙一 2 章 4-8 節における生きた石の描写で最高潮に達します。これらの聖句は、嵐にも耐えうる揺るぎない土台を賢明に選ぶことから始まり、裁きに耐えうる建築材料を慎重に選び、恵みによって結び合わされた聖なる家族の一員となり、そして最後に、礎石であるキリストを中心に活気に満ちた構成要素として整列するまで、途切れることのない流れを生み出しています。著者が見た夢をきっかけに聖書を深く探求したこの研究は、神の言葉に従うことが、いかにして神を敬い、永遠に続く強固な霊的基盤を築くかを明らかにしている。

賢明な土台：聞くことと従うこと（マタイによる福音書 7:24-27）

イエスは山上の垂訓の終わりに、この建築の比喩を始め、二人の建築家を対比させることで、信仰に根ざした従順の重要性を強調しています。「だから、わたしのこれらの言葉を聞いて実行する者は皆、岩の上に家を建てた賢い人に似ている」とイエスは宣言します（24 節）。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いて家に打ちつけましたが、土台がしっかりしていたため、家は倒れませんでした。これは、神の真理を信頼し、実践することに根ざした人生を象徴しています。対照的に、愚かな建築家は同じ言葉を聞いても実行せず、砂の上に家を建てました。嵐が襲うと、「家は倒れ、その倒れ方はひどいものでした」（27 節）。このたとえ話は、重要な出発点を示しています。土台はイエス・キリストご自身であり（パウロが後にコリントの信徒への手紙一 3 章 11 節で明らかにしているように）、従順こそが家をキリストの上にとしっかりと固定し、人生の試練に耐えることを保証するのです。

耐久性のある素材で建築する：火による試練（コリントの信徒への手紙一 3:9-15）

イエスが賢明な建築を強調したことから直接派生して、パウロはコリント人への手紙第一 3:9-15 でその比喻を拡張し、教会内の分裂に対処し、建築における責任を強調しています。「私たちは神の働きにおいて協力者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です」とパウロは書いています(9 節)。彼は土台を明確に示しています。「だれも、すでに据えられている土台、すなわちイエス・キリスト以外に、他の土台を据えることはできません」(11 節) — これはマタイのたとえ話の不動の土台と完全に一致しています。この唯一の土台の上に、各建築者は注意深く働かなければなりません。「だれでも、この土台の上に金、銀、宝石、木、干し草、わらで建てるなら、その人の働きは明らかになります。その日がそれを明らかにするからです」(12-13 節)。火は各人の働きの質を試すでしょう。忠実な従順、永遠を念頭に置いた奉仕、キリストに根ざした教義といった、永続する素材は生き残り、報いをもたらすが、朽ちるものは燃え尽きてしまう。しかし、建築者は「炎の中を逃れる者のように」救われる(15 節)。これは、イエスの教えに責任という要素を加えることで、さらに発展させている。つまり、単に正しい土台を築くだけでなく、永続的な誠実さをもって建築することである。

神の家族として一つになる：聖なる神殿へと成長していく（エペソ 2:19-22）

パウロはエペソ 2 章 19-22 節でこのイメージをさらに発展させ、恵みによって信者たちが一つの神の住まいに結び合わされる共同体的な次元へと移します。もはや「異邦人や寄留者」ではない異邦人は、「神の民と同じ市民であり、また神の家族の一員」(19 節)であり、「使徒と預言者の土台の上に建てられ、キリスト・イエスご自身が隅の親石となっている」(20 節)のです。キリストにおいて、「建物全体が結び合わされて、主にあって聖なる神殿へと成長していく」(21 節)のであり、信者たちは「共に建て上げられ、神が御霊によって住まわれる住まいとなる」(22 節)のです。これは前の箇所から自然に流れ出ています。土台はキリスト（マタイとコリントの信徒への手紙一）であり、使徒と預言者の教えも含まれると詳細に述べられ、キリストが隅の親石としてすべての部分を完全に調和させているのです。恵みは結びつきの力である。キリストの和解の働きはユダヤ人と異邦人を結びつけ、分裂を防ぎ、神の聖なる住まいへと着実に成長することを可能にする。

礎石と調和する生きた石：受け入れか、それともつまずきか（ペテロの手紙第一 2:4-8）

ペテロは第一ペテロ 2 章 4-8 節でこの比喻を生き生きと描き出し、家をダイナミックな霊的現実として表現しています。「あなたがたは、生ける石であるキリストのもとに近づき、人からは捨てられたが、神の目には選ばれ、尊い石であるキリストのもとに近づき、あなたがた自身も生ける石として霊的な家として建て上げられています」(4-5 節)。信者は聖なる祭司となり、イエス・キリストを通して

神に受け入れられる霊的ないけにえを捧げます。ペテロは聖書を引用して、キリストを「建築者たちが捨てた石、隅の親石となった石」(7節、詩篇 118:22 より)、「人をつまづかせる石、人を倒れさせる岩」(8節、イザヤ 8:14 より)と断言しています。信じて従う者にとって、キリストは尊い一致と栄誉であり、従わない者にとって、キリストはつまづきの源なのです。これは、土台(マタイによる福音書/コリントの信徒への手紙一)、統一された神殿(エフェソの信徒への手紙)という一連の流れの頂点であり、今や、継続的な従順を通して、生きた参加者たちが積極的に礎石の周りに配置されている。

すべてを織り合わせる：まとまりのある精神的建造物

これらの聖句は完全な調和をもって結びつき、霊的な家に対する神の包括的な計画を明らかにしています。マタイによる福音書 7章 24-27節は、キリストの言葉を聞き従い、揺るぎない土台(コリントの信徒への手紙一 3章 11節では明確にイエス・キリスト)の上に家を堅固にするという命令を確立しています。コリントの信徒への手紙一 3章 9-15節は深みを加え、火の試練に耐える材料を用いて慎重に建設するよう促し、その唯一の土台の上に個人の責任を強調しています。エペソの信徒への手紙 2章 19-22節は共同体規模にまで広がり、使徒と預言者の上に築かれた信者たちを、神の神殿への完全な一致と成長を保証する礎石であるキリストとどのように結びつけるかを示しています。最後に、ペテロの手紙一 2章 4-8節は活力を吹き込み、静的な材料を、生きた礎石の周りに積極的に建てられる生きた石に変え、信仰が祭司職と栄誉をもたらし、不信仰がつまづきにつながることを示しています。統一されたメッセージは明確です。イエス・キリストこそが唯一の土台であり、礎石です。従順は永続的な基盤を築き、恵みは結びつき、支えます。その結果、あらゆる嵐や裁きにも屈しない、神が宿る聖なる生きた神殿が築かれます。いかなる時点においても不従順は崩壊や喪失の危険を伴いますが、キリストと完全に一致することで、神を栄光に輝かせる永遠の住まいが生まれます。著者の夢に触発された研究から生まれたこの統合されたビジョンは、すべての信者に、神の王国のために賢明かつ従順に築き上げるよう呼びかけています。

基礎：キリスト、使徒、旧約聖書の預言者たち

霊的な家は、キリスト、使徒たち、そして旧約聖書の預言者たちという土台の上に築かれている(エペソ 2:20)。それぞれが、信者の信仰を支え、従順を導く上で、独自の役割を果たしている。

- キリスト、礎石：イエスは礎石であり、全体の構造を整列させる存在です(エペソ 2:20、イザヤ 28:16)。イエスの生涯、教え、そして犠牲は、信仰と従順の基盤です。神の言葉(ヨハネ 1:1)として、イエスは聖書全体を支えておられますが、ご自身で書かれたわけではありません(テモテ第二 3:16)。霊的な家のあらゆる側面は、イエスと調和することで真実であり続けます。

- 使徒たち：キリストによって選ばれたパウロ、ペテロ、ヨハネなどの使徒たちは、聖霊の導きのもと、靈感を受けた新約聖書の著作（福音書、書簡など）を通して基礎を築きました（ペテロ第二 1:20-21）。彼らの教えは、信者たちに正しい生き方と神の御心への従順を教えています（ヨハネ 16:13-14）。
- 旧約聖書の預言者たち：イザヤ、エレミヤ、モーセといった預言者たちは、神の靈感を受けて、キリストの到来を預言する聖書を書き記しました（例：イザヤ書 53 章、申命記 18 章 15 節）。彼らの著作は、使徒たちの教えとともに、信仰の土台を形成しています（エフェソの信徒への手紙 2 章 20 節）。彼らの靈感を受けたメッセージに従うことは、信者をキリストと結びつけますが、それを拒むことはつまずきにつながります（ペトロの手紙一 2 章 8 節）。

礎石と基礎の例

以下に、キリストの教えと使徒や預言者の教えが重なり合った例をいくつか示します。

コーナーストーン	基礎
マタイによる福音書 7:24-27	コリント人への手紙第一 3:9-15、エペソ人への手紙 2:19-22、ペトロの手紙第一 2:5-8
マタイによる福音書 13:33、マタイによる福音書 16:5-12	コリント人への手紙第一 5:6-13、ガラテヤ人への手紙 5:1-15
マタイによる福音書 5:5	詩篇 37 篇
マタイによる福音書 5:43-48	箴言 25:21-22、ローマ人への手紙 12:20-21
マタイによる福音書 5:21-30、マタイによる福音書 15:18-20、マルコによる福音書 7:20-23	ガラテヤ人への手紙 5:19-21、ローマ人への手紙 1:29-31、箴言 6:16-19

読書を重ねることで、読者はより多くのことを発見できる。

信仰-πίστις - Πισティς

- 1) 何かの真実性に対する確信、信念。新約聖書では、神と神聖な事物との関係に関する確信または信念を指し、一般的には信仰から生まれ、信仰と結びついた信頼と聖なる熱意という概念を含む。
 - a. 神との関係

1. 神が存在し、万物の創造主であり支配者であり、キリストを通して永遠の救いを与えてくださるという確信

b. 1b) キリストに関する

1. イエスがメシアであり、彼を通して私たちは神の国で永遠の救いを得るという、強く歓迎すべき確信または信仰

c. キリスト教徒の宗教的信念

d. 神またはキリストに対する信頼（または確信）という考え方を主眼とする信仰、同じ信仰から生じる

2) 忠誠、誠実

a. 頼りになる人物の性格

詩篇 14:1

- 信仰は単なる選択肢ではなく、心のあり方そのものである。
- 宗教を信仰していても、実際には無神論者であることは可能です。（あなたは神が存在するかのように生活していますか？）

ヘブライ人への手紙 11:1-3

- 信仰とは、「そもそも真実ではないと分かっていることを信じる」ことだけではない！
- それはただ暗闇への飛躍ではない。（それは光への飛躍なのだ！）
- それは精神的な確信である。

ヘブライ人への手紙 11:6

- 信仰なしに神を喜ばせることは不可能だ。
- 私たちは神の存在を信じることができるし、信じなければならない。
- 彼はそこにいる。真剣に探せば、必ず見つけることができるだろう。

ヤコブの手紙 2 章 14-26 節

- 行動を伴わない信仰は無意味である。
- 義人であろうと努める：罪に対処する。・ 神との関係を築こうと努める：祈り、聖書研究。
- 他者を助けるために努力する：教会活動、伝道活動、困っている人々の世話。
- 信仰は、それが行動を伴う信仰であるときにのみ完全となる。
- アブラハムの信仰と行動は一体となって作用した。創世記 22 章では、神はアブラハムが真の信仰を持っていたことを、彼が従順であった瞬間にのみ知ったと記されている (22:12)。
- 行いのない信仰によって義とされる者はいない (ヤコブ 2:24)。
- 注：ルター (1500 年代) は「信仰のみによる義認」と「一度救われたら永遠に救われる」という信念に基づき、ヤコブの手紙全体を否定した。また、ヘブライ人への手紙も否定した。なぜなら、この書は救いを失う可能性があるとして繰り返し述べているからである (ルターはこれに反対した)。

ヘブライ人への手紙 11:4-10

- 信仰によって、アベルは神に受け入れられるいけにえをささげた (ヘブライ人への手紙 11 章 4 節)。
- ノアは神からの警告を受けて、信仰によって家族を救うために箱舟を建造した (ヘブライ人への手紙 11 章 7 節)。
- アブラハムは信仰によって従い、異国へ旅立った。なぜなら、神が彼をさらに良い住まい (すなわち天国) へと召しておられることを理解していたからである (ヘブライ人への手紙 11:8-10)。
- 行動する信仰とは、神の生きた言葉に対する正しい応答である。

神の約束への信仰 (忠実な行動とは、神の約束の条件を満たすことによって定義される)

1. 神は私たちが祝福したいと願っている
 - A. 神が人類と関わる際、常に神の恵みを惜しみなく与えるという形で特徴づけられてきた。ただし、その条件として、信仰と神の意志への服従が求められる。つまり、条件付きの約束 (もし…ならば…) という形で約束がなされるのである。

B. 聖書の中で「信仰の父」として知られるアブラハムは、すべてを捨てて神に従い、約束の地へと旅立った。祝福を受けることは、彼の従順さにかかっていた（創世記 12:1-4）。

a. これらの約束は後に、神とアブラハムとの契約として語られることになる。

2. 旧約聖書と新約聖書

A. 前回のレッスンで述べたように、聖書は大きく 2 つの部分に分かれています。旧約聖書と新約聖書で、それぞれに異なる 2 つの契約が記されています。

B. 歴史上、神は二つの非常に特定の集団と契約を結ばれました。一つはエジプトから召し出されたイスラエルの民と、もう一つは世から召し出されたクリスチャンたちです（ヘブライ人への手紙 8 章 6-13 節）。

C. 旧約聖書は戒律という観点から捉えられることが多いが、実際にはそれらの律法の背後にある約束こそが契約の基礎となっている（申命記 7:12-15）。

a. 残念ながら、イスラエル人の信仰心の欠如は、彼らが神の祝福を受ける資格を失わせた（イザヤ書 1:2-7）。

3. 新しい契約のより良い約束の例

A. 私たちがまず神の国と神の義を求めるならば、神は私たちのあらゆる物質的な必要を満たしてくださるでしょう（マタイによる福音書 6:33）。

B. もし私たちがイエスのもとに来て、彼のくびきを負い、私たちの重荷を彼に委ねるならば、私たちは霊的な安息を見いだすでしょう（マタイによる福音書 11 章 28-30 節）。

C. 悔い改めてバプテスマを受けるなら、罪の赦しと、神の内住する聖霊の賜物を受けるでしょう（使徒行伝 2:36-39）。

D. 神の御心を行うことに忍耐強く取り組むことは、神の祝福を私たちに保証する（ヘブライ人への手紙 10 章 35-39 節）。

4. 神の教えに従うことは真理の知識へと導く

A. アブラハムは信仰によって従い、異国へ旅立った。なぜなら、神が彼をさらに良い住まい（すなわち天国）へと召しておられることを理解していたからである（ヘブライ人への手紙 11:8-10、13-16）。

- B. アブラハムは信仰によって従い、イサクをささげた。なぜなら、彼は神が死者をよみがえらせることができると信じていたからである（ヘブライ人への手紙 11:17-19）。
5. 私たちの生活は、私たちが信じることと一致していなければならない（テモテへの手紙第一 4:16）
- A. 私たちは正しいことを信じ、正しい生き方をしなければならない。
- a. 救いを受けることと、メッセージを効果的に伝えることは、私たちの生活と教義に深く関わっています。
- b. 今週は、自分が何を信じているのか、そしてその信念をどれだけ実践できているのかについてじっくり考えてみましょう。

服従 - ὑπακοή - hupakoē

- 1) 服従、従順、服従
- 2) 誰の助言にも従うこと、キリスト教の要求事項を守ることによって示される従順さ

従え - ὑπακούω - hupakouō

- 1) 聞く、耳を傾ける
 - a. ドアをノックされた時に、誰が来たのかを聞きに来る者（門番の務め）
- 2) 命令に従う
 - a. 従う、服従する、服従する

旧約聖書の教え —— 旧約聖書の時代に生きた3人の人物を考察してみましょう。

サウル—サムエル記上 15 章（抜粋）

- 15:1-3: サウルは特定の命令に従うよう求められる。
- 15:7-9: サウルは命令に部分的にしか従わなかった。
- 15:12-31: 彼は罪を犯したことを認める前に、かなり抵抗する。言い訳ばかりだ！
- 結論：

- a. 部分的な服従は不服従である！
- b. 選択的な服従は不服従である！
- c. 自分が従順であったかどうかについて、完全に騙されている可能性もある。

ウッザーサムエル記下 6:1-7

- 神は、ご自身の言葉に背くことを重大なこととみなしておられます！
- 誠実さは罪悪感を消し去るものではない（コリント人への手紙第一 4:4）。
- これは不公平に聞こえますか？ダビデもそう思っていました、神の言葉が何を言っているのかを知るまではそう思っていました（歴代誌上 15 章 12-15 節参照）。

ナアマン—列王記下 5:1-15

- 5:10: 神の言葉は明快で分かりやすい。
- 5:11: 神の言葉に対する感情的な反応に注意しなさい。
- 5:11：先入観を捨てましょう。
- 5:12: いいえ、神の言うことを行うこと以外に選択肢はありません。
- 5:13: 物事を客観的に捉え、論理的に考えるためには、助けが必要です。
- 5:14：神は従順を祝福される。
- 5:14: おおよその従順では不十分です（ヨルダン川に 5 回浸かるか、またはパルパル川に 7 回浸かること）。
- 5:15: 私たちは実際に神に従い始めると、神に感謝し、敬うことを学ぶ。

新約聖書の教え：イエスとその弟子たちが従順について何を教えていたのかを見ていきましょう。

マタイによる福音書 7:21-23

- 彼らは信仰心が篤く、活動的で、おそらく誠実な人々だったが、道を見失っていた。
- 神に従う者だけが天国に行ける。
- 神との救いの関係を持っていると信じていても、実際には全く救われていないということもあり得る。

ヨハネによる福音書 14:15、23-24

- 服従は旧約聖書の律法の一部に過ぎません。イエスと新約聖書は、服従について繰り返し論じています。
- 愛と服従は、実質的に同義である。

ヨハネの手紙一 2:3-6

- 2:3：イエスの従順な弟子として生きるなら、あなたは救いを確信できます。
- 2:4：もしあなたが彼を知っていると主張しながら、不従順であるなら、あなたは嘘つきです。
- 2:6：私たちはイエスの生き方に倣わなければなりません！従順はキリスト教の中心的な要素です。

結論

ご覧のとおり、十字架によって服従が選択肢になったわけではありません。それは、真の神の信者にとって常に不可欠なものでした。あなたは何によって服従を妨げられてきたのでしょうか？

恵み—*ἀρις* - charis

1) グレース

- a. 喜び、楽しみ、歓喜、甘美さ、魅力、愛らしさをもたらすもの：言葉の優雅さ

2) 善意、慈愛、好意

- a. 神がその聖なる影響力を魂に及ぼし、キリストへと導き、キリスト教の信仰、知識、愛情を保ち、強め、増し加え、キリスト教の徳を実践するよう促す、慈悲深い慈しみについて。

3) 恩寵にふさわしいもの

- a. 神の恩寵の力に支配された者の霊的な状態
- b. 恩恵の証または証明、利益

i. 恵みの贈り物

ii. 恩恵、報奨

4) 感謝、(恩恵、サービス、好意に対する) 報酬、報奨

使徒パウロは、おそらく同時代の誰よりも神の恵みを深く理解しており、だからこそ多くのことを成し遂げられたと述べています（コリント人への手紙第一 15:10）。恵みの概念を理解し、それを明確に教えることは私たちにとって不可欠であるため、私たちは恵みについてバランスの取れた理解を得るためにパウロを選びました。

エペソ人への手紙 2:1-10

- 私たちは罪によって神に対して死んだも同然です。世間の望むように生きたり、自分の欲望に従ったりすると、神の怒りの対象となるのです。
- 神の恵み（私たちへの愛）のおかげで、私たちは救われることができます。私たちはそれに値する人間ではありませんが、受け入れるならば、それは私たちにとって無償の贈り物なのです。
- 私たちはキリストへの信仰を通して救われるのです。
- 神の愛は、私たちに善行を行うよう促す。

ローマ人への手紙 5:6-11

- 恵みの定義：私たちが神の敵であった時、神は私たちを深く愛し、キリストが私たちの罪のために死ぬことを許された。頭字語：キリストの犠牲による神の富。
- 私たちは罰を受けるに値する罪人だったが、神は私たちの代わりに苦しむためにキリストを遣わされた。
- イエスの血によって私たちは神の怒りから救われる（赦しを得るためには血を流さなければならない [ヘブライ人への手紙 9:22、28]）。

テトス 2:11-14

- 恵みとは、私たちにとって救いを意味する。
- 神の愛は私たちを罪から清めるように導きます。私たちは神の恵みを悪用することはありません。
- 恵みは情欲に打ち勝つものだが、罪を犯すための免罪符ではない（ユダ 4 節）。恵みは安価なものではなく、イエスは命を犠牲にしてそれを得たのだ。

コリント人への手紙第一 1:18-25

- 十字架は、罪に対する神の力強い解決策である。
- 神の愛を理解しなければ、十字架のメッセージは私たちにとって愚かなものとなるだろう。

コリント人への第二の手紙 5:14-21

- キリストの愛は、応答を求めるものです！（コリントの信徒への手紙一 15:9-10 参照）
- イエスは私たちの罪を背負い、自らが罪、あるいは罪のいけにえとなられた。
- 神の愛は、私たちが神のために生き、神のために語るように促します。

コリント人への手紙第一 15:9-10

- 努力によって救われるというのは真実ではないが、神の恵みに最も影響を受ける人々は、神のために最も熱心に働く人々であるというのは真実である。

箴言 3:34

- この聖句は、恵みと結びついた謙遜について語っています。
- ペテロとヤコブの引用（ペテロの手紙第一 5:5、ヤコブの手紙 4:6）

恵みは罪や怠惰を許すものではない

恵みを罪（あるいは怠惰）を続ける許可だと誤解し、「神はとにかく許してくれるだろう」と考える人もいます。しかし、聖書はこれを強く否定しています。

- 「それでは、私たちは何と言えよいのでしょうか。恵みが増し加わるために、罪の中に留まるべきでしょうか。決してそうではありません。罪に対して死んだ私たちが、どうしてなおも罪の中に生き続けることができるのでしょうか。」（ローマ 6:1-2）
- 恵みは私たちに「不敬虔と世俗的な欲望を捨て」、そして「慎み深く、正しく、敬虔に生きる」ように教えます（テトス 2:11-12）。
- 恵みを不道德の免罪符に歪める者は裁かれる（ユダ 4）。神の恵みは代価を伴うものであり、キリストは命を捧げられた。そして、それは罪を正当化するのではなく、罪を克服する力を与える。パウロが言ったように、「私は神の恵みによって今の私であり、私に対する神の恵みは無駄

ではなかった。私は彼らすべてよりも多く働いたが、それは私自身ではなく、私と共にあった神の恵みによるのである」(コリント第一 15:10)。真の恵みは、怠惰ではなく、神の王国のために熱心な従順と勤勉を促すのである。

信仰、従順、そして恵みの有名な例

1. アブラハム：

- 信仰：アブラハムは、神の約束を信じたことから「信仰の父」として知られています。彼は神の指示に従って故郷を離れましたが、どこへ行くのかも知りませんでした(創世記 12:1-4)。
- 従順さ：彼の従順さは、神の計画を信じて息子イサクを犠牲にしようとした時に最も有名に示されています(創世記 22:1-18)。
- 恵み：アブラハムは、高齢で子供を授かることを神の約束だと疑って笑うなど、欠点があったにもかかわらず(創世記 17:17)、神は彼に恵みを与え、アブラハムの人間的な弱さにもかかわらず契約を成就された(創世記 15:6、ローマ 4:3)。

2. ノア：

- 信仰：ノアは、洪水が起こる兆候が全くなかった時に、神が洪水について警告したことを信じた(ヘブライ人への手紙 11 章 7 節)。
- 従順さ：彼は神の指示に細心の注意を払って箱舟を建造した。それは嘲笑される可能性もある中で何年もかかる作業だった(創世記 6:22)。
- 恵み：神はノアとその家族を洪水から救い、その後彼と契約を結ぶことによって恵みを示された(創世記 6 章 8 節)。

3. モーゼ：

- 信仰：モーゼは、イスラエルをエジプトから救い出す神の力を信じており、神の約束を確信してファラオに立ち向かった(出エジプト記 3:10-12)。
- 従順さ：彼はイスラエル人をエジプトから荒野へと導くための神の詳細な指示に従った(出エジプト記 3~40 章)。
- 恵み：モーゼは最初はためらい、後には不従順な行動(岩を打つなど)も見せたが、どもりにもかかわらず指導者に選ばれ、死ぬ前に約束の地を見ることが許されたことから、神

の恵みは明らかであった（民数記 12:3、申命記 34:1-4）。

4. イエスの母、マリア：

- 信仰：彼女は、社会的な影響を顧みず、天使ガブリエルが自分が神の子を身ごもると言ったことを信じた（ルカ 1:38）。
- 従順：彼女は天使に対して、「ご覧ください、わたしは主のはしめです。お言葉どおり、この身に成りますように」と、従順な態度で答えた。
- 恵み：イエスの母となるよう選ばれた彼女には神の恵みが注がれていました。それは、計り知れない信仰と従順さを必要とする役割でした（ルカ 1:28-30）。

5. デビッド：

- 信仰：ダビデの信仰は、ゴリアテとの対決において、神の救いを信じたことで示された（サムエル記上 17:45-47）。
- 服従：ダビデは多くの失敗を犯したにもかかわらず、神の命令に従うことで神に従おうと努めた。特に、神に油注がれたサウルに危害を加えることを拒否した時がそうだ（サムエル記上 24:6）。
- 恵み：ダビデは神の恵みを繰り返し経験しました。特にバテシバとの罪の後、悔い改めた際には、赦され、神の心にかなう人として称えられました（詩篇 51 篇、使徒行伝 13 章 22 節）。

追補

エペソ人への手紙 2 章 20 節に旧約聖書の預言者が登場するのはなぜか？

エペソ人への手紙 2 章 20 節には、教会は「使徒と預言者という土台の上に建てられており、イエス・キリストご自身が隅の親石である」と記されています。「預言者」という言葉は、おそらく旧約聖書の預言者を指していると考えられます。その理由は以下の通りです。

1. 聖書的背景：エフェソの信徒への手紙において、パウロはユダヤ人と異邦人が共通の土台の上に築かれた教会における一致を強調しています（エフェソ 2:14-18）。メシアとすべての国々に対する神の計画を預言した旧約聖書の預言者たち（例えば、イザヤ 42:6、49:6）は、使徒たちの新約聖書の教えを補完する聖書の基盤を提供しています。これは、初期キリスト教徒が敬愛した歴史的なユダヤ教の聖典と一致しています。

2. 聖書的先例：旧約聖書は、新約聖書におけるキリスト教信仰の基盤としてしばしば引用されています（例：ローマ 1:2、ヘブライ 1:1-2）。イエスご自身も、律法と預言者（旧約聖書）がご自身を指し示していると断言されました（マタイ 5:17、ルカ 24:44）。エペソ 2:20 に旧約聖書の預言者を含めていることは、この連続性をさらに強固なものにしています。
3. 預言者の役割：旧約聖書の預言者は主に神の靈感を受けた聖書（ペテロ第二 1:21）を伝え、それが使徒たちの著作と並んで初期教会の権威ある基盤となりました。新約聖書の預言者は啓示と励ましの賜物（コリント第一 14:3）を持っていますが、教会の基礎となる聖書を定める役割を担うとは一般的に考えられていません。
4. 文法構造：エペソ 2 章 20 節では、「使徒と預言者」が一つの土台としてまとめられており、旧約聖書の預言者が使徒の働きに先行し、それを補完していたという歴史的な流れを示唆している。もし新約聖書の預言者を指していたのであれば、パウロは彼らを別々に区別するか、「教会の預言者たち」（エペソ 4 章 11 節のように）といった表現を用いたであろう。
5. 神学的整合性：礎石（キリスト）と土台（使徒と旧約聖書の預言者）は、両方の契約における神の計画の統一された啓示を表しています。新約聖書の預言者を含めると、初期教会における彼らの役割が使徒と重複するため（例：使徒行伝 11:27-28）、重複が生じる恐れがあります。

別の視点：旧約聖書と新約聖書の預言者たち

一部の学者は、エフェソの信徒への手紙 2 章 20 節の「預言者」には旧約聖書と新約聖書の預言者の両方が含まれると主張し、以下の点を根拠としている。

- 新約聖書の預言：エペソ人への手紙 4 章 11 節では、預言者が教会への賜物として言及されており、教会の設立における役割を示唆している（例：使徒言行録 11 章 28 節のアガボ）。
- 初期教会の背景：新約聖書の預言者たちは、正典が完成する前に啓示を与え、それが教会の基盤形成に貢献した可能性がある。

しかし、この見解は可能性が低い。理由は以下の通りである。

- 新約聖書の預言者たちは、旧約聖書の預言者たちのように権威ある聖典を説くのではなく、主に状況に応じた指針（例えば使徒行伝 21:10-11）を提供した。
- エペソ人への手紙 2 章 20 節における基礎的な役割は、一時的な預言の言葉ではなく、永続する聖書（旧約聖書と使徒たちの著作）を強調している。

- エフェソの信徒への手紙におけるパウロの焦点は、歴史を通して貫かれる神の計画の統一性であり、それは旧約聖書の預言者と使徒たちを結びつけることによって最もよく示される。

このように、「預言者」を旧約聖書の預言者と解釈することで、キリストを指し示す不朽の聖典に根ざした、より明確で一貫性のある教会の信仰の基盤が築かれる。

実践例：家を建てる

強固な霊的家を築くには、信仰、従順、そして恵みを統合する必要があります。

- 信仰を強める：キリストの教えを礎石として、毎日聖書（例えば詩篇 119 篇）を学び、信頼を深めましょう。
- 土台に従いなさい：使徒たちと旧約聖書の預言者たちの靈感を受けた教えに従いなさい（例えば、マタイによる福音書 7 章 24-27 節を実践し、イエスの言葉に従って行動しなさい）。つまづきを避けるためにキリストに同調しなさい（ペテロの手紙一 2 章 8 節）。
- 恵みに頼りましょう。神の家族の一員として、神の恵みによって支えられていることを信じましょう（エペソ 2:8-9、19-22）。信仰において他の人々を励ますことで、恵みを分かち合しましょう。
- 毎週の課題：信仰に関する目標を一つ（例：詩篇 119 篇を読んで神の言葉を理解する）、従順な行動を一つ（例：マタイによる福音書 6 章 14-15 節に従って誰かを赦す）、そして恵みの行いを一つ（例：隣人に仕える）設定しましょう。礎石であるキリストに倣うために、ペテロの手紙第一 2 章 5-8 節を学びましょう。